福井県におけるアイヌ遺俗

島田静雄

先史時代研究学徒の方々のために県内にも曽てアイヌ民族が安住してゐた例証を民俗学方面より述べて御参考に資したい。

アイヌ民族は東北、北海道、樺太以北の住民で中部地方には住んでゐなかつたのではないかといふ質問をよく受ける。中部地方のみならず九州沖縄まで南下してゐたのである。（以下の実証は三十餘年間この問題と取り組んで苦学した私の独創で多くの学者への反逆的論争ともなる）

若狭の日向も九州の日向も同語原でアイヌ語の Piuka（石原の意）であり、阿蘇火山のアソもアイヌ語で北海道のアトサぬぷり、大野市旧小山村のアトソと同語原で atssa とは火山の禿山の意である。大野市のアトソは阿難祖と記してアドソと呼んでゐる。仏教習俗から阿難尊者云々の文字から生れた伝説を生んでゐるのは笑止千万である。これは阿稚祖と原語に忠実に充てた仮借文字であるが稚の字を草書体の難の字と誤字したもので呼び方はやはりアチック即ちアトソと呼んでゐることによつても解明する。

よく問題になる高千穂の峯であるがこれも固有名詞ではない。火山のある所なら必ず命名される地名である。摺鉢形の噴火口を指すもので tap（山の）chip-o（女陰）に充てた漢字名である。（国体の尊厳を瀆すものと叱かられるかも知れないが）これはアイヌ語ではないが奇振岳（クシフルタケ）は草振る岳の転訛である。ウハバミなどが笹の葉を動して歩行する様が恰も神が草葉を動揺させて渡り来るものと信じての心理上の事実の表現である。日本歴史の記紀も今少しく民俗学的に解明の要を痛感する。

さて話を元に戻して樺太に大泊あり越後に泊あり若狭にも泊あり沖縄にも泊あり何れも港である。アイヌ語 tomari も港の意で彼我同語である。沖縄で〇〇神といふのを〇〇カナシといふ。このカナシはアイヌ語の kanna（上方の）shiri（国）即ち天国、上天の意の転訛であり、巫女のことをノロクモイといふ。クモイは kamui（神）の転訛で雲井、鴨居などと同語原でありノロとはアイヌ語の narui（甚だ大きい、最高のなどの意）の転訛で最高の神といふ意である。坂井郡に鳴鹿（ナルカ）村があり鹿の鳴き声によつて水源地と見出したといふ伝説を生んでゐるが、これは narui（甚だ大きい）ka（丘）の意で九頭竜川沿岸のこの地の地形を文句などに説明してゐる。

このノロクモイに関する神に奉仕する者は女性に限り……沖縄では今も尚男性禁止……（久高島）男性が奉仕する場合は女装せねばならない事、母系制であることなどについて述べて彼我の同一民俗にも及びたいが紙数に餘裕を有たないので号を改めて御参考に資することとして県内に於ける方言、民俗、地名等によつて彼我の交流を紙数の許す限りあげて大方の御高批を仰ぐこととする。

ここで一つ御留意願ひたいことは、数次の(2)はアイヌ語もツーであり英語もツーであるといふ偶然の一致から類音で解釈で附会の説に耳を傾けてはならないことである。

アイヌ娘を内地人はメノコと呼びアイヌ特有語だと今だに信じてゐる向きが多い。豈計らんやメノコは邦語の男の子（オノコ）に対する

女の子であつて、アイヌ語では確然として娘を表現するにmatne-po or hepereといふ語があることである。このメノコのnがrに通転してメロコ、メロとなり女児女性をメロといふ方言が生れて居りメノコ又メロコは邦語でアイヌ音ではないのである。小刀のことをマキリといひ之もアイヌ語だと現在のアイヌ自身も信じてゐる向きも多いがこれは邦語の薪切りが伝はつたものである。アイヌ語で耳輪のことをニンカリといふ。筆者も最近まで純アイヌ語だと信じてゐた一人である。このニンカリはアイヌ語でなく邦語の耳金が彼に伝へられたもので mimi-kane →min-kane →nin-kare→nin-kari と次第に通転したものである。すると耳輪といふものはアイヌ特有の習俗ではなくなる。耳輪については文明人の仏画にもその例を多く見る。南山大学の依頼で先天的に耳朶に穿穴のある人を探し廻つて唯一人若狭でその人に出会つた。之は民族遺伝する由で優秀民族であるとのことであるからアイヌも曽ては優秀民族を真似ることが一般となり習俗となつたものかも知れないと考へるのである。某文博がその著書にエラチカ（ゴム紐）が福井県の方言と明記してゐるなどと等しくアイヌ語の詮策には慎重を要する。

一方アイヌ人でありながらアイヌ語を知らぬ学者も居る。先般物故した知里真志保文博はアイヌ人である。尤も小学時代より邦語で教育されて来たアイヌ人ではある。その著「アイヌ語入門」（一九五六年出版）の第五ページの全ページを私への反論で埋めてゐる。

それはそれより二年前に「北海道史研究」誌に掲げた私の「樺太地名考」に対するものである。私の所論はその原語kuri（暗い）muntum（草原）即ち湿地の意でツンドラ地帯を指したもので、これがクリモント（バッチェラー辞典にはクリモントと明記してある）更に転訛してカラモント　カラブト　カラフトと呼ばれるに至つたといふに在つた。ところが知里氏はクリモントなどいふ語はバッチェラー辞典にだけあつてアイヌ語ではないと反向するのである。彼氏が南山大学の講師だつた一九五七年、同大学の中山英司博士の連絡で彼氏と同大学で会見の機を得て追究したところクリモントはアイヌ語でないが、クリ、ムンツムは立派なアイヌ語であると承認して兜を抜いたがカラフトの地名については何の明答もなかつた。私もこれ以上追究するのは気の毒に思はれてそのまゝに放棄してしまつた。

当北海道には「狩太」なる地名あることを附記して本論にはいる。

言語の上から

○イロリは囲炉裡などの漢字を充ててゐるがこのイロリはイルレが原語であるが之は「温まる」といふ転意語である。ところがこのイロリのことをイレシといふ部落が県下に唯一ケ所ある。大野郡和泉村上伊勢部落がそれで純然なるアイヌ遺俗である。イレシ、フチが原語で火の神の意、フチの省略形であることは慥かである。

○エントロリ　足羽郡宇坂地方で今にも落ちさうな熟柿をエントロリといふ。原語は『エツ（鼻）オロ（から）プ（物）即ち鼻汁のことである。日ソ間に問題のエトロフ島についてはアイヌ間に烏の鼻汁が島となつたといふ伝説があり、クラゲのことをフンベ（鯨）エトロツプ（鼻汁）といふのを見ても熟柿がエトロツプ

（鼻汁）であることは承認されよう。語尾のリは附りであらう。

○昔の貧農や乞食は大抵野菜を入れた粥をすすつたものでこれをゾロと称した。このゾロに充てる漢字はない。sayo-oro-pのアイヌ語の語尾のpが消略されたものである。

○セータ　背負具の一種で小梯子様のもので背板など充字する向きもあるが板ではない。これはシンタ（揺籠）でアイヌはあのセータ様の具に幼児を縛りつけて哺乳の時もそのまゝ授乳し、仕事中は四隅を縄で縛つて木の枝に吊り下げて揺り動かし、移動する時は背負つて行くといふ哺育具でもある。このシンタがセータに転訛したものである。

○ボッカ　山間部の荷物運搬者で右のセータを専用する。歩荷など充字する古文献もあるがこれは pakkay（背負ふこと）の転訛。

○ツシ　山間部の農家で竹材木材を渡した二階である。二階といつても物置だが。これを網代のことで tesh が原語で簗を意味する。このテシの多い所○が北海道天塩の国である。（ツシといふ方言を用ひない部落が唯一つ県内に在る。それは阿部晴明の居城地奥名田村納田終でこゝではアマといふ）

○シクマ　勝山地方で熊よりも小さくムジナより稍々大きいものをシクマといふのも sekuma-kamui（山の神）といふ熊の隠語からである。

○シブトイ　図々しいこと。一回ならず二三回と忍び込むとは随分シブトイ奴だなといふのも shimputoi（歩の遅いこと）の転意である。

○サックリ　終戦と同時に麻の耕作を禁止されてから麻織はすつかり影をひそめたが作業衣としては良質のものであつた。これもasan-kara（麻織布）の頭音aの消略されたものである。当アッシは厚司といふ漢字を充当してゐるが之はアッといふ木（楡）の皮の繊維で作つた布でこれをアッ、ウシといふ麻は漂白されるがアッシは純白にはならない。然し前者は雨を通すが後者は雨を通さない利点があり寒気厳しい所では凍結をさけることが出来る。

○ナギ　焼畑を作ることをナギを焼くといふ。ナギは nange（草を刈ること）の転で草薙の劒の草薙は重語である。

○カスナ　勝山地方で特言かとも考へられる。今日はカスナ暑さや。左義長はカスナ人出やつたなど「餘りに」の意に使用される。これは kasu-no（餘りに）が原語である。

○セキラウ　七八十歳の老人は今も使用する。争ふ、喧嘩する意でsekamram（争ふ）の転訛である。

○テンコロ　仲の良いことの表現に甲と乙はテンコロやといふ。猫の子が互に戯れることを二疋がテンコロテンコロ遊んでゐるなどいふ。その語原はtemkoro（抱擁する）である。

○ブサル　負ふこと。祖母にブサレテ寝てゐる。子供をブシて行く。など使用する語でアイヌは旅嚢のことを pusari といふ。

○ヘチャ　醜女をいふ。ヘチャな娘で嫁に貰ひ手がないなどいふ。アイヌ語pechanは脊せる意である。

○四ケ浦辺で泥のことをいふ。これは完全なアイヌ語で pet（水）toi（土）である。

○ヤカナル　勝山地方で多く聞く方言で躁

ぐことの意。喧嘩でもあるのか大勢でヤカナツてゐるなどいふ。yakanak のアイヌ語は姉女子の驚声をいふ。

○ムカツパラ立てる　激怒する意で ukoparata はアイヌが相手を侮辱する際自己の陰部を表すことで尻喰への意でもあらう。

○オセカミ　坂井郡の山間部で狼のことをいふ。wase（吠える）kamui の下略である。

○ケンナイド　招かざる客、不時客を若狭でいふ。之は kerai（恵む）の r が n に転訛してケナイとなり人が附加されたもので、家来もこれが語原であらう。

○鱒のスリ　産卵後味の落ちた瀕死の鱒である。アイヌ語 oshiru は産卵せし鮭の意である。これが動詞化されて鱒がスツてるなどともいふ。又経験者、老衰者をスリ呆（ボ）けともいふ。

○アヂチ　分家（兄のみの分家をいふ所もある）ashit（新しい）chisei（家）の下略。

○ヒシ　三方郡食見海岸では海岸をいふ。アイヌ語 pish も亦海岸の意である。

○ケラ　足羽郡宇坂地方で蓑をいふ。アイヌ語 kera も亦蓑である。

○カリンバ　足羽郡上味見地方で山桜をいふ。アイヌも亦カリンバといふ。

○カイコミ　勝山地方の老人は今も尚手の附いた小さい桶をいふたのもアイヌ語の kakkum（水桶）からである。

○イネ　勝山市北谷地方で母親をいふ。ウネといふアイヌ語の転で同地方で坂のことを

○ヒラ　といふのも pira（断崖）の転である。

○オロムシ　繊維から織布と作るイラクサのことで大野市打波地方の方言である。原語はオロ、モシで原意は oro（甚だ）mosh（痛い）である。

○ニヨ　藁、稲などの堆積をいふ。柳田先生は神に供する贄（ニエ）の転だと断定されたが私は反対する。之はアイヌ語の nip（貯蔵倉）の意で丹生などにも赤土の多い所のみとは限らずこの山中の貯蔵倉を意味して命名された地名である。

○ドンブリ　食器の丼、泉水、水溜などいふのも tompuri（泉）の転意転訛である。

○ホメル　火傷後の痛みの場合などに、ホメルといふのは homeru（痛む）とアイヌ語がそのまゝ温存されてゐるものである。

○モンペ　戦時中おしなべて着用したモンペもアイヌ語である。原語はオム（股）ウンにはくペ（物）の頭音省略で、オムの股が地名になると川又の所の意で地名としてはオム（股）ウシ（…の所）となり武生市の大虫村の原語となる。之はポルトガル語のモンペとはいはない地方に越美国境の穴馬地方がありカルサンと呼んでゐる。Calciao が原語で同地方が表日本文化の影響を受けてゐることを物語り文化の移動の跡が示されて方言調査の興味深々たるものがある。